ギヨーム・デュプラ　博多かおる訳
『地球のかたちを哲学する』
西村書店　二〇一〇年

人が最初に「地球」にかたちがあることを、あるいは、もっと正確に言えば、「地球というかたち」を認識するのは、おそらく世界地図においてではないだろうか。そしてその後、地球儀を通して、「地球」が文字通り球体であることを理解する。地図が先か地球儀が先かという順番はこの際どうでもよいだろう。いずれにしても、平面と球体という次元の異なる「地球」のかたちを誰もが幼い頃から持っているのだ。ところが、小学校だか中学校の教科書にはこの「地図」が中立で正確なものではなく、「メルカトル図法」とか「ミラー図法」という名前のついた、ある用途に適したものだということを知る。他にも、「モルワイデ図法」や「グード図法」などがあり、地球は科学の時代にあっても複数の「かたち」をとっている。メルカトル図法は角度の正確さを特徴とし、航海のための正確な方角を得られるようになっているが、角度の正確さを遵守するため、高緯度になるほど地形は拡大され、原理的に極地は無限大となる。つまり、メルカトル図法では地球は描けないのである。この弱点を克服するために考案されたのがミラー図法のようだが、こんどは正角が損なわれる。球体たる地球を正確に再現するには地球儀が必要となるのだが、メルカトル図法が示すように、地球はそれを見る人間の用途にしたがって「歪んだ」形を与えられてきたのである。逆に言えば、地球の「かたち」からは、その「かたち」を与えた人間の思想や文化といったものが見えてくるのであり、地球の「かたち」はある意味で人間の「かたち」だとも言えるのだ。

ギヨーム・デュプラの『地球のかたちを哲学する』のオリジナルタイトルは地球という語の複数形を考慮して、『さまざまに想像された地球についての本』(*Le Livre des Terres imaginées*)とでも訳せるだろうか。タイトル通り、この本の中では、時代を問わず、さまざまな民族や学者たちが唱えた地球の「かたち」が――それらはみな、それぞれが実にユニークなものだ――描かれている。平たい円形だったり、横に長い長方形だったり、三角形だったり、八角形だったり……

また、地球の中身は水で詰まっていたり、磁石になっていたり、巨大な火が燃え盛っていたり……

そこには、地球に「かたち」を与えてきた人々の思想や文化の「かたち」があらわれている。そして、その「かたち」は、まず言葉を通して、物語としてあらわれるのである。最初の例を見てみよう。現代（二十世紀）ベナンのフォン族がつくりだした地球の「かたち」である。

> フォン族の長老たちによると、神様はまず空と海をつくり、それから大地をつくろうとしました。ところが、大地には山や木がたくさんあって、あまりにも重かったのです。そこで神様は、アイダ・ウェドゥという、とっても大きなヘビに「力をかしてくれ」と、たのみました。それ以来、ヘビはとぐろをまいて、背中の上に大地をのせています。（12頁）

著者であるデュプラの素敵な絵が――忘れてはならないが、本書は児童向けの絵本である！　――この物語に視覚的な「かたち」を与えている。ヘビは当然、生き物だから、動くはずだし、お腹もすくだろう、神様や人間が思うようにはじっとしていてくれない。こうして、地球の底にヘビというかたちを与えたフォン族は、そこに新たな物語を書き連ねていくことになる。ヘビがどこにも行かないように赤い猿たちが絶えずヘビに鉄の棒を食事として与えているが、体を動かしてしまえば、地球は揺れて、地震が起こることになる。

なるほどアフリカの民族らしい想像力豊かな微笑ましい「かたち」だね、と思うかもしれないが、科学者だって負けずおとらずの面白い「かたち」を考えだしている。「ハレー彗星」の発見者エドモンド・ハレーは「地球の中は空洞で、そのなかにもう一つの球が入っている」（54頁）と考え、フランスのアンリ・ゴーチエは同じく地球の中身は空洞と考えたが、地球の外からの力と中からの力が押し合って凹凸をかたち作りながらもなんとか落ち着いたと考えた。ゴーチエによれば、地球の内側にも外側と凹凸が反対になった世界があり、そこにも人間は住むことができたのである。しかけ本になっている本書は、時に物語られる地球のかたちを隠し、読む者に地球のかたちを想像させる結構になっている。最後には「現在の地球」として「現在の」科学が導きだした客観的な正しい地球のかたちが提示されているが、そこまでたどり着いた読者は「正しい」ということにいくらか違和感を覚えるのではないだろうか。物語と同様、かたちには「正しい」ものが果たしてあるのだろうか、誰にとってそれは「正しい」のだろうか。かたちは用途によって、目的によって変化するのであり、大ヘビに支えられた地球は、ベナンの民族からすれば「正しい」かたちなのではないか。そうしたことがふと頭をよぎるだろう。この絵本が教えてくれるのは、実は自己と実在をめぐる、まさに「哲学」的な問いなのではないだろうか。つまり、正しい真の地球のかたちという実在があって、自己はそれに可能な限り接近するために言葉やかたちという媒体を駆使するのではなく、言葉（＝物語）やかたちはそれ自体、ある特定の目的を果たすために――特定の人々のあいだの理解の共有のために――偶然に生み出されるものではないのだろうか。だとすれば、唯一正しいかたちというのは存在しないことになるだろう。

普段は意識することなどないが、地球がはっきりと目に見えているにもかかわらず、実のところ、見えないものであるという不思議な事実を本書はあらためて認識させてくれる。考えてみれば、地球というのはとても不思議なものだ。タイトルにある「地球」（Terre）という語は「大地」を意味する。そして「大地」は、私たち人間の存在をしっかりと支えてくれ、安心させてくれる人間存在そのものの足場であるが、同時に、その足場はあまりに大きいために感官のレベルでは捉えることができない。だからこそ人は生活や慣習に合った自らの足場を確かなものにしようと、そのかたちを構想してきのだといえる。

本書はボローニャ国際児童図書賞を受賞した児童向けの絵本だが、もちろん大人でも楽しめるものである。むしろ一読して、子供には難しいのではないかと大人の方が感じてしまうほど豊かな内容になっている。しかし、訳者は児童書であること

を十分に意識して、丁寧な訳文を心がけており、内容の難しさが、子供にとって案外問題にならないほどのレベルにまで達していると思われる。難しいのではないか、というのは、実は大人が勝手に心配することであって、子供にとってはしばしば問題にならないことが多いのではないだろうか。自分が暮らしている地球の、直接的には永遠に目にすることがないであろうその「かたち」に子供が興味を持たないわけはなく、本書で提示される様々な地球の「かたち」と物語は、人間と文化は決して普遍的で単一ではなく、さまざまな「かたち」を持っているのだということを子供に教え、場合によっては、子供に自分にとっての地球の「かたち」を思い描くことを許すだろう。その際、プラトンやプトレマイオスやガリレイや陳子といった固有名は、あのフォン族の大ヘビ、アイダ・ウェドゥと同じくらい、たいした意味を持たないのである。

（桑田光平）